



Title	Risk of Parkinson's disease-related death in cancer survivors: A population-based study in Japan
Author(s)	早野, 絵梨
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/103122
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨
Synopsis of Thesis

氏 名 N a m e	早野 絵梨
論文題名 Title	Risk of Parkinson's disease-related death in cancer survivors: A population-based study in Japan (がん患者におけるパーキンソン病関連死のリスク)
<p>論文内容の要旨</p> <p>〔目 的(Objective)〕</p> <p>人口の高齢化で神経変性疾患のパーキンソン病（PD）の患者数は増加している。一方、本邦における死因の第一位であるがんについても高齢化と治療の進歩でがん生存者は増加しており、両疾患双方に罹患する患者は今後増加していくと予測される。両者の合併は予後に影響すると考えられるが臨床経過や予後について調べた報告はない。本研究ではがん患者におけるがん患者のPDに関連した死亡リスクについて明らかにすることを目的とした。</p> <p>〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕</p> <p>方法：1995年-2013年の期間にがんと診断され、大阪府がん登録（Osaka Cancer Registry [OCR]）に登録された患者を対象に、人口動態統計を突合し、OCRにおける「がん罹患情報」と「死因情報」を集約し作成された解析データベースを用いた。がん患者と一般人口集団のPDに関連した死亡リスクを比較することを目的に、日本の暦年・性・年齢別PD死亡率を基準として、標準化死亡比（Standardized mortality ratio：SMR）を算出した。また特定のがん患者における死亡リスクを評価することを目的に、相対リスク（Relative risk：RR）を算出した。</p> <p>成績：最終解析対象者は548,485人でそのうち死因がPDであったのは145人であった。一般人口と比較して、がん患者はPDにおける死亡のリスクは2.34倍と上昇していた（SMR：2.34〔95%信頼区間1.99-2.75〕）。SMRは60-64歳をピークに年齢が上がるほど低下傾向を示し、またがん診断の時期が新しいほど増加した。がん種については、調査期間当時、PD治療薬の殆どが経口薬であったことから、その内服経路である口唇・口腔・咽頭、食道、胃のがんとそれ以外のがんに分けて解析したが、前者では3.72倍PDにおける死亡リスクが上昇していた。またRRについては、性別、診断時期、がんのステージではリスクに差はなかったが、年齢が高いほどRRは上昇し、さらに口腔～胃のがんではそれ以外の部位のがんより2.07倍のリスク上昇が認められた。</p> <p>〔総 括(Conclusion)〕</p> <p>本研究はがん生存者におけるPDに関連した死亡リスクを明らかにした初の大規模疫学研究である。がん患者548,485人のデータベースを解析した結果、がん患者ではPD関連死のリスクが、一般人口の2.3倍になることが明らかとなった。PDの直接死因として肺炎、誤嚥、窒息等の呼吸器関連の合併症が多く、PD罹患者がこれらの疾患で死亡した場合PD死と判定される可能性が高い。リスク上昇の背景としては、腫瘍自体や治療によるADLや免疫機能の低下、栄養状態の増悪により肺炎等の感染症が増加し、PD死と判断されるリスク上昇につながることが考えられた。さらに嘔気や粘膜障害など化学療法の副作用や放射線治療の後遺症でPD治療薬の投与が制限されることや、薬物相互作用やドーパミン吸収部位の切除術・再建術などで治療薬の吸収率が低下することで、PD症状の管理が不十分となり、結果、肺炎や誤嚥のリスクが増加しPDに関連した死亡のリスク上昇につながっていると考えられた。</p> <p>がん種別の解析では、口腔～胃のがんとその他のがんで比較すると、前者でSMR、RRともに高い結果が得られた。PD治療薬のほとんどが経口薬であったため、特にこれらの癌では、治療薬の内服困難となりやすく、PDの症状コントロールに難渋した結果と考えられる。現在では貼付剤やデバイス製剤が開発されており、併存疾患や全身状態に合わせこれら製剤を組み合わせた管理が求められる。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 早野 絵梨				
論文審査担当者		(職)	氏 名	
	主 査	大阪大学教授	望 月 香 樹	署 名
	副 査	大阪大学教授	片 山 泰 一	署 名
	副 査	大阪大学教授	池 田 亨	署 名

論文審査の結果の要旨

パーキンソン病（PD）は病期の進行に伴って誤嚥・肺炎等で致命的な転帰を辿る進行性の神経変性疾患であり、患者数は人口の高齢化で世界的に大きく増加すると予測されている。同様に高齢化と治療の進歩により、本邦の死因第一位であるがんの生存者数も上昇し、今後PDとがん双方に罹患する患者は増加すると推察される。本研究はがん生存者におけるPDに関連する死亡リスクを評価した初の大規模疫学研究である。がん患者548,485人のデータベースを解析し、がん患者ではPD関連死のリスクが一般人口の2.3倍になることを示した。さらにがん種別の解析で、PDの内服治療薬の投与経路となる口腔～胃のがんではその他のがんより、PDに伴う死亡リスクが2.07倍上昇する結果を示した。これらの知見は、両疾患が併存する患者の管理に際し、PD治療薬として新たに開発された貼付製剤やデバイス製剤を組み合わせる等臨床現場で患者を治療する際に役立つと考えられ、学位に値するものと認める。